

都市の祭りからみた生活文化を支えるメカニズム

中野 紀和

はじめに

本稿は、福岡県北九州市小倉北区で行われる「小倉祇園太鼓」という祭りを事例として、都市の祭りにおける変化とその要因を、社会状況と重ねて考察し、そこから生活文化の動態について明らかにするものである。

まず、北九州市と祇園太鼓の背景について述べる（1. 小倉祇園太鼓の事例から—祭りの背景—）。次に、祭りにおける変化を捉える視点として、「形態の変化」と「形態を維持するための中身の変化」を挙げ具体的に示す（2. 都市祭礼における変化を捉える視点）。後者については既に別稿で詳細に論じており重複するため、ここでは概略を示すに留めている¹⁾。本稿ではそれらを踏まえ、両方の視点を生かしながら祭りにおける開放性と閉鎖性の動態を示し、さらに都市の生活文化の動態に言及する（3. 開放性と閉鎖性の相互性）。

ここで、生活文化という概念について明らかにしておきたい。生活文化という概念については、寺出浩司や米山俊直らによって規定がなされている。

寺出は、J. H. スチュワードの「文化とは後天的に学習され、集団によって共有され、世代を通じて継承される行動様式と世界観である」²⁾という文化概念を受け入れ、時実利彦の「生きている」「たくましくいきていく」「うまく生きていく」「よく生きていく」という生の質的区分と³⁾、「生物学的・生理的欲求に応える手段として文化は生まれる」という見方をとるマリノフスキイの「栄養補給、親族関係、防衛、行為、訓練、衛生」といった「生きるために手段的対応」を組み合わせている。時実のいう前者の2区分がマリノフスキイの「基本的欲求」に、後者2区分が「文化的欲求」に対応するとした⁴⁾。

米山もスチュワードの文化概念に依拠し、生活文化の分析方法と内容の類別を試みている。生活文化には「ひとひと系の分析」「ひと一もの系の分析」「ひと一もの系の分析の一部としてのひとかねの分析」「ひとこと系の分析」「ひとこころの分析」という方法があるとする⁵⁾。

これらを踏まえて、石川実は彼らの概念に「生活文化は個々人が自らの生命の存続を支えるための活動のなかから生み出したものであり、それが集団的に支持され、世代的に継承されたもの」という共通項を見出している。さらに、そこに含まれる「官に対応する民の生み出したもの、公的な社会システムの維持を意図するのではなく、地域社会(あるいは生活圏)や家族といった私的生活システムの維持を第一義的目的として生み出されたもの」という点を指摘する。その上で生活文化の内容を、非形象的生活文化・形象的生活文化・制度的生活文化に分類する。非形象的生活文化には、思想、国語・方言、信仰、生活の知恵、技能・芸能などがあたる。形象的生活文化には、身体的形象(化粧などの自己表現としての身体加工)と表象的・造形的形象(民謡、工芸、道具、建造物など)があたる。制度的生活文化には、身振り、行動様式、日常的慣習、マナー、関係様式、地位配分や役割の設定、組織化の原理や集団の語り、地域共同体構成の形や運営方法、種々の集団などがあたる⁶⁾。

筆者がここで行う考察は、石川の生活文化概念に基づいている。まず、祭礼自体が信仰を基にした生活の知恵でありそこに芸能が伴うことから、非形象的生活文化である。さらに、祭礼のなかで、参加者が様々な自己表現としての身体加工をしている側面は、現代性を反映した結果と捉えることができ、形象的生活文化といえる。祭礼を遂行するにあたっては、協働や上下関係といった関係様式が浮上する。従来の地縁・血縁による集団とは異なる新たな集団が出現し、それに伴って運営方法も変わってくる。これらの点は制度的生活文化ということができる。つまり、祭礼自体が生活文化の複合体であり、その祭礼を多角的に分析することで生活文化の一端を明らかにできると考える。

1. 小倉祇園太鼓の事例から 一祭りの背景一

福岡県北九州市は、九州の東北端に位置し、海に面した北部は港湾・工業地帯として開発されている。市街地は工業地帯と背後の山に挟まれ、北部の東西に発達している。最近では南部と西部に市街地化が進む。同市が、全国で6番目の政令指定都市となったのは1963年(昭和38)である。当時は、小倉区、八幡区、若松区、戸畠区、門司区の5行政区であったが、1972年(昭和47)に小倉は北区と南区、八幡は西区と東区に分かれ7行政区となり、現在の北九州市が誕生した。

なかでも小倉北区は、小倉城を中心とする城下町としての歴史をもち、政治や経済、文化に関する機関が集積する。現在、小倉駅周辺、大手資本の参入など商業地域としての開発が進む一方で、小、中学校の統廃合が進むなど、中心地域ほど過疎化が進む傾向にある。

2001年6月現在の市全体の人口は1,009,090人である。1974年に100万人を超え、1979年にピークを迎えて以降、徐々に減少傾向が進み、かろうじて100万人を保っている。市の中心地ともいべき小倉北区の人口は現時点で186,782人であるが、人口の減少が著しい。

小倉祇園太鼓は小倉北区の八坂神社の夏季大祭である。創始年代については諸説あるが江戸時代の初期であることは確かなようである。日程は旧暦の6月1日頃から行われていたとされるが一定しておらず、大正期頃より7月12・13・14日となり、1987年(昭和62)以降は7月の第3週末の3日間へと変更された。1958年(昭和33)に福岡県の無形文化財に指定され、その後、文化財保護法の改正に伴い、1976年(昭和51)には無形民俗文化財に指定される。観光客を含め、例年70万人近い人出があるとされる。

神社の祭りとして初日と二日に御神幸や御還幸も行なわれるが、主役は山車に乗せた太鼓である。子どもたちの曳く山車の前後に据え付けられた直径一尺二寸から五寸(36.4~45.4cm)の太鼓を、打ち手が両側からそれぞれ「カン」と「ドロ」という異なる打法でジャンガラ(すり鉢)のリードに合わせて打つ(写真1)。この技が競演大会で町内毎に競われる。この祭りが全国的に名を知られるようになったきっかけは、小倉を舞台にした映画「無法松の一生」(1943年公開)のラストシーンである。祭りに関わる組織は・神社・町内・小倉祇園太鼓保存振興会・企業・有志チームであるが、本稿で特に注目するのは、この映画の影響を受け、若者の動きが最も活発な有志チームである。



写真1：太鼓を山車の前後に据えつけた町内の山車

2. 都市祭礼における変化を捉える視点

筆者はこれまで小倉祇園太鼓をフィールドとして、さまざまな角度からの分析を試みた結果、都市の祭りにおける変化を捉える視点には「形態の変化」と「形態を維持するための中身の変化」があること、その要因として社会的要因と心理的要因が考えられることを指摘した⁷⁾。前者は集団に注目し、祭祀組織や地域の内部と外部の関係性を論じ、それを社会変動の過程に対応した結果として捉える視点である。後者は個に注目し、個人の意識のあり方を論じ、形態の変化との関わりを明らかにしようとする視点である。祭りは国家や資本をはじめとしてさまざまな影響を受けるため、その要因を地域の内と外、あるいは集団の内と外から論じることは、これまでの祭り研究の基盤であり多くの研究蓄積がある。報告者もまた同じ視点から論じてもいる。

その一方で、集団を構成するひとびとの心理的要因について論じた研究は皆無と言ってよい。そこで、祭りにおけるモードの最先端にいる若者の語りや行動から意識のあり方を探り、心理的要因について指摘したい。

2-1. 祭礼における形態の変化

ここでは、祇園太鼓の形態の変化と社会との関わりを、「表1 社会変化と祇園太鼓との関連」を参照しながら概観する。

～江戸時代

祇園太鼓の形態については、当初は賑やかな囃子が従い、当番町による踊り屋台が出されていた。これらの飾り立てられた山車や踊り子、囃子が町を練り歩くことを「まわり祇園」といった。これとは別に、一本の竿や六尺棒の前後を担ぎ、その棒につるした太鼓を歩きながら打つというスタイルもあり、こちらは自分の町内だけを打ってまわった。

幕末～明治維新

幕末の小倉戦争（1866）や明治維新によって、曳きものの舞台人形や踊り屋台、祭礼道具が失われてしまう。そのうち、町内をまわっていた太鼓が行列に加わり、山車の前後につくようになり、次第に屋台や囃子は姿を消し、太鼓は山車の前後に据え付けられていく。

明治の終わり～大正

太鼓が山車の前後に据えつけられた形が定着する。祭りの形態の転換期である。北九州における明治中期は、官営八幡製鉄所の開業、筑豊の石炭地帯の開発、門司・若松両港の発展が重なり、近代都市へと変貌する時期である。この時期、まわり祇園は姿を消すが、太鼓の技を競うなど、太鼓を前面に押し出した祭りとして盛んになっていく。

1945～1955年（昭和20～昭和30）復興期

第二次世界大戦中は一時中断されたこともあるようだが、終戦まもない1947年（昭和22）に、早くも祇園太鼓の競演大会が開催され、技の競い合いが盛んになっていく。

その後、1958年（昭和33）には小倉駅が移転する。駅の移転は商業地域の移動を意味し、それまでの中心地域が廃れる原因となった。この年、祇園太鼓は福岡県民俗文化財指定を受ける。翌年1959年（昭和34）に小倉城が復元され、保存会事務局も小倉城へ移転する。この移転を契機として、神社中心の祭りが次第に変わりはじめる。

1960年（昭和35）～高度経済成長期：祭りの形の変化

1960年頃から高度経済成長期が始まり、1963年（昭和38）には、全国総合開発計画が発表される。北九州市も五市合併をおこなうなど地域の再編がなされる。高度経済成長期には、石炭や製鉄で知られた北九州市も第三次産業への転換を迫られることになる。

1970（昭和45）～万国博覧会：海外公演とイベントの増加

1970年には祇園太鼓は大阪の万国博覧会に出演するなど、活動の場を広げていく。1973年（昭和48）には第一次オイルショックにみまわれる。その後、国土開発が進み、1975年（昭和50）には新幹線が博多駅まで開通する。この翌年に、住友金属が企業として初めて祇園太鼓に参加する。町内という地縁を基にした従来の参加単位に変化が生じる。

1977年（昭和52）～ 第三次全国総合開発計画 都市における新しい祭りの誕生

1982年（昭和57）に、さらに二つの企業が参加するが、このときは初の女性だけの参加という点で話題となつた。これ以後、バブル期にかけて1991年（平成3）頃まで、毎年のように新たな企業の参加が続く。

＜表1＞ 社会変化と祇園太鼓の関連

年代	社会状況	祇園太鼓	その他	動態
江戸時代		囃子、当番町による踊り屋台、山車や踊り子「まわり祇園」一本の竿や六尺棒の前後を担ぎ、その棒につるした太鼓を歩きながら打つ(自町内)		
幕末～明治維新	小倉戦争（1886）	曳きものの舞台人形や踊り屋台、祭礼道具の焼失 →町内をまわっていた太鼓が行列に参加、山車の前後へ →屋台や囃子は消滅 太鼓は山車の前後に据え付けられる		
明治中期	官営八幡製鉄所の開業 筑豊の石炭地帯の開発 門司・若松両港の発展	「まわり祇園」 消滅→太鼓の技の競い合いへ	近代都市への変貌期	
明治終～大正時代		太鼓が山車の前後に据え付けられる形が定着	祭りの形態の転換期	
1943年（S 18）		映画「無法松の一生」上映	映画「無法松の一生」上映	メディア(開)↔地元の反発(閉)
1945年～1955年			復興期（全国的）	
1947年（S 22）		「小倉祇園太鼓競演大会」開催		
1958年（S 33）	小倉駅の移転	保存会事務局の小倉城への移転 福岡県民俗文化財指定		
1959年（S 34）	小倉城の復元	保存会事務局の小倉城への移転		
1960年～	高度経済成長期		祭りの形態の転換期	
1963年（S 38）	全国総合開発計画が発表される 北九州市の五市合併		第三次産業への転換期	
1970年～				
1970年（S 45）		万国博覧会への出演→活動の場の拡大	海外公演とイベントの増加(全国的)	有志の芽生え(開)↔「本物」ではない(閉)
1973年（S 48）	第一次オイルショック			
1974年（S 49）	北九州市7区制へ			
1975年（S 50）	新幹線の博多駅開通			
1976年（S 51）		企業チームの祇園太鼓参加(企業第1号)	参加形態の変化	企業参加(開)↔地元のルール遵守(閉)
1977年～	第三次全国総合開発計画		都市における新しい祭りの誕生(全国的)	
1978年（S 53）	モノレール工事着工～1985			
1982年（S 57）		企業の参加(初の女性チーム) ～1991年(H3)企業参加の増加		女性だけの参加(開)↔
1987年～	第四次全国総合開発計画		祭りとイベントの急増(全国的)	
1985年（S 60）		祇園太鼓太鼓の日程変更に関する協議		日程変更・観光客誘致(開)↔
1987年（S 62）		7/12・13・14→第3週末へ変更		
1988年（S 63）	北九州市のマスタープラン 「北九州ルネッサンス構想」の策定(旧中心地域の再開発等) 市制25周年記念「わっしょい百万夏まつり」の開催		ボランタリー・グループの増加 地縁・血縁→選択縁	創作容認(開)↔「正調」と区別(閉)
1989年（H元）		「据え太鼓競演大会」の開催		
1992年（H 4）			おまつり法(地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律)	
1999年（H 11）		競演大会において企業チームを別枠で審査		

1987年（昭和62）～ 第四次全国総合開発計画：祭りとイベントの急増

バブルといわれる好景気は1986年（昭和61）頃から始まるが、その前年に祇園太鼓は日程変更に関する協議をおこなっている。結局、1987年（昭和62）から7月の第3週末の3日間へと変更された。

1988年（昭和63）には北九州市のマスタープラン「北九州ルネッサンス構想」が策定され、そこには旧中心地域の再開発も含まれていた。また同年、市制25周年を記念して、祇園太鼓も含め近隣地域の祭りを一同に集めた「わっしょい百万夏まつり」が新たに開催された。

1989年（平成元）からは、増え続ける有志チームを対象とした「据え太鼓競演大会」が開催されるようになる（写真2）。彼らは80年代に増加した新しい参加者層であり、結社縁、言い換えれば個人の選択縁を基盤とする参加単位である。

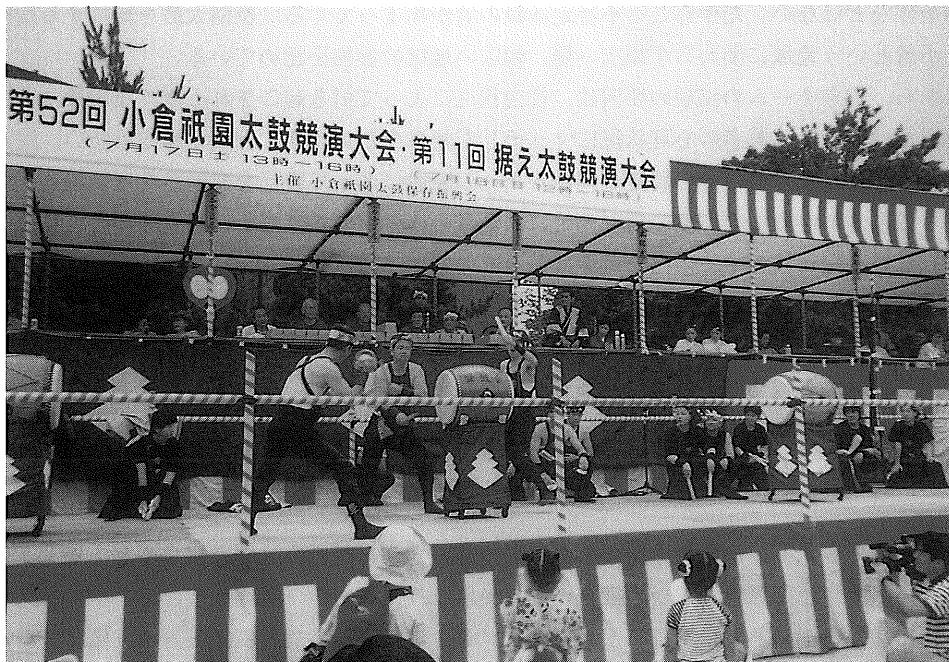


写真2：有志チームによる「据え太鼓」

1992年（平成4）には、おまつり法（地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律）が打ち出されて以降、数え切れないほどの祭りやイベントが誕生する。

以上のことから、明治～大正、昭和の高度経済成長期にかけて、まず祇園太鼓における形態の変化が起こる。次に、戦後の復興期から参加集団の変化、それに伴う人間関係の変化がみてとれる。社会変動に伴い、祭りの存続のためには変化の受容を余儀なくされた過程が明らかになる。

2-2. 形態を維持するための中身の変化

参加集団の変遷を見ていくと、80年代以降はボランタリー・アソシエーションというべき有志チームの存在が大きくなっていく。中心地域の過疎化や高齢化、少子化という現状に対応するにあたり、祭りが変化していくのは仕方のないことではあるが、有志チームの出現を社会的要因のみに還元してよいものであろうか。彼らが出現する理由のひとつは、祭りそのものの存続が危ぶまれるという状況において、小倉以外の者でも受入れるという参加条件の拡大が暗黙のうちになされたことである。社会変動に伴う祭りの変化は、小倉に限らず多くの祭りで起こっている。その際、新たに参加する集団には、主体的参加によるボランタリー・アソシエーション的な集団が多い。そこで、小倉祇園太鼓においても、若者がなぜこのような有志チームに参加するのか、どのようなプロセスを経て参加にいたるのか探り、祭りと社会変化の関係を別の角度から明らかにする必要が出てくる。その結果、以下のような動きが明らかになる。

昔からの町内の住民が郊外へ引越した後、祭りのときだけ戻って参加することに、小さな子どもなら抵抗はな

くとも、中学生ともなると普段顔を合わせていないために恥ずかしくなり祭りから遠ざかる（祭り離れ）。

親と一緒に参加してきた子どもの場合、思春期になると親と一緒にいることが煩わしくなるという「親への反発」、あるいは異性の友だちと遊ぶほうが楽しいという「色気（地元では「色気づく」という表現が頻繁に聞かれた）」から、いったん祭りから離れてしまう者が多い。自意識が強くなり他者を強く意識するようになる中学生・高校生の時期に祭り離れを起こすのである。数年して参加したくなった時に、戻れる場所がある者、あるいは戻ることに抵抗のない者は戻るが、町内自体が祭りに参加できない状況にある場合は有志チームが受け皿になる。あるいは町内で参加できるにも関わらずカッコイイ姿を求めて有志チームへ入会する者が現れる。

同じような異性を意識した声は、学校単位で半ば強制的に参加させられている高校生からも聞かれる。太鼓を派手に打って格好よければ参加することに抵抗はない、格好悪い自分を女の子に見られるのが嫌だ、という声である。裏を返せば、カッコイイ姿なら見てもらいたいという気持ちがある。有志チームの入会に際しては居住地域による参加条件などはない。だからこそ不特定多数の者が集まってくる。祇園太鼓を統括する役割を果たす保存振興会も、小倉という地域に関わらず幅広い層、幅広い地域の参加を認めている。

以上のことから、有志チームの出現の要因は、社会状況によって引き起こされる様々な現象によってもたらされる社会的要因だけでなく、若者の心理状況にマッチした結果だといえる。行政主導ではない、民意が創りだした現象だといえる。祈りよりも、その周辺のエネルギーの発散によって自己を充足させる装置として有志チームが機能していることがわかる。その際の自己充足には他者の存在が欠かせない。視覚を媒介とした「見る一見られる一見せる」という関係性の中で自己充足をはかっている。

心理的要因が見出せるのは諸関係の結果であり、他者（特に異性）を強く意識し、同時に自己のあり方を見つめなおす彼らの心理とその動向には、他者性をひとつの特質とする都市社会のありようが集約されている。そこに、地域や集団という枠を越えて、若者に共通した拡張性をもった特徴を見出すこともできる。

3. 開放性と閉鎖性の相互性

祭りにおける形態の変化と、形態を維持するための内容の変化を重ね合せて考察すると、地元と地元をとりまく外部との間で、開放性と閉鎖性の二つの動きが明らかになる（表1の「動態」参照）。

1943年（昭和18）の映画の上映は、結果としてマスメディアによる小倉と祇園太鼓の宣伝につながり、外部からの働きかけによる開放性の強い動きである。同時に、「あれは本当の祇園太鼓ではない」という地元の反発も起り、外部に対する閉鎖性の強い動きが生じる。

1970年代に入り、海外公演やイベントの増加に伴い、現在の据え太鼓の原型となる創作太鼓が地元の極一部の間で起こる。彼らは小倉っ子であるが、太鼓好きを集めて全国に通用する祭りにすることを目指し、あえて新しい動きを起こそうとする。開放性の強い動きである。その一方で、この時期は彼らに対する強い非難が地元で沸き起こる。「本物の祇園太鼓」にこだわる閉鎖性へ向かう動きである。

1976年（昭和51）の企業チームの参加は、従来のネットワークとは異なる会社を中心とした参加単位の出現であり、新たな動きである。これに対しては、企業名を前面に出さないこと、従来のルールに従うこと、という強い規制が各町内からかかる。参加は認めつつも、明らかに境界線を引こうとする動きが生じる。

1982年（昭和57）の企業チームによる女性のみの参加と、1985年（昭和60）の日程変更の協議は、祇園太鼓にとって転換期となる大きな出来事であるが、好意的に受け取られている。開放性の強い動きに対する反動はほとんど見られない。80年代のこの時期は、据え太鼓のスタイルで創作太鼓を打つ有志チームが急増する時期である。40年代の映画や70年代の創作太鼓に対してみせた反発がここではそれほど起きてこない。

1989年（平成元）の「据え太鼓競演大会」は、新しい動きの容認であると同時に、従来守ってきた「正調」と言われる打法との明確な区別を意味しており、開放性と閉鎖性が並存しているといえる。

このように、社会状況に呼応して祭りも変化を遂げていくが、その動きには開放性と閉鎖性が表裏一体となって現れる（図1）。図1はその動態であるが、けっして開放性や閉鎖性のどちらか一方だけが突出して破綻するのではなく交互に現れ円環していること、また、同一軌道上を動くのではなく、状況に応じてズレながら円環していることを示すものである。



図1 都市の生活文化のメカニズム

このような動きを追っていくなかで、もう一点明らかになる。内部と外部を形成する際の基準の変化である。開放性の強い動きに対して反対の動きがあまり見られなかった80年代と、反対の動きが生じる80年代以前では地域伝統を支える側が拠り所とするものが大きく変わる。80年代以前は性別や参加単位に強くこだわり、これを守ることで内部と外部の境界線が引かれている。参加単位にこだわることができるだけの実体としてのコミュニティが存在していたことが改めてわかる。

80年代以降はそのこだわりが薄れ、「正調」と「創作」を区別するなど打法へのこだわりが前面にでてくる。不特定多数の参加者を包摂するためには、従来のコミュニティに代わる境界線が必要となる。それが打法である。何を境界線とするかは、実体としてのコミュニティを体験している世代と、生まれたときから現在の状態のなかで育った若者たちの世代では大きな違いが生じる⁸⁾。

本稿では触れていないが、現在の環境で育った若者たちと上位世代との間では、祭りによって喚起される記憶も、祭りに寄せる意識も全く異なっている。その若者たちがこれから祭りを担っていく以上、コミュニティと結びついた「伝統」や「伝承」のあり方も変化していかざるを得ない⁹⁾。この点については、別稿で深く掘り下げ論じる予定である。

おわりに

以上のように、不特定多数の参加者を包摂していこうとする動きと、有志チームの具体的なあり方を重ねてみると、都市の祭りには他者を意識しながら開放と閉鎖の関係性が表裏一体となって現れることがわかる。さらに、このような動きは他者性を内在化した都市社会に通じるものであると考えることができる。その動きに便乗しながら、祭りに生じるエネルギーをいかに自由に発散させるか、その発散のメカニズムが都市社会における新たなネットワーク形成の鍵となるだろう。

注

- 1) 有志チームについては既に拙稿（「都市祭礼における流動層—小倉祇園太鼓を事例として—」『日本民俗学』205号 日本民俗学会 pp. 87–95 1996、および「ライフヒストリーからみた都市民俗の生成—小倉祇園太鼓と映画『無法松の一生』の関わりから—」『生活學論叢』vol. 2 日本生活学会 pp. 65–78 1997）で論じているのでそちらを参照されたい。
- 2) 『文化変化の理論』米山俊直・石田絆子訳 弘文堂 1979 [1955]
- 3) 時実利彦『人間であること』岩波書店 1970
- 4) 寺出浩司『生活文化論への招待』弘文堂 1994
- 5) 米山俊直「生活文化とはなにか」足立己幸・寺出浩司編『講座生活学5 生活文化論』光生館 1995
- 6) 石川実「生活文化のとらえかた」石川実・井上忠司編、『生活文化を学ぶ人のために』世界思想社 1998
- 7) 拙稿「都市祭礼における有志チームの発生と機能—その考現学的研究—」（『生活學論叢』vol. 1 日本生活学会 pp. 15–27 1996）を参照のこと。
- 8) 祭りと地域の関係については、発表後の質疑応答のなかでスペインの祭りと比較して「なぜ、日本人は地域を捨てられるのか」という質問を受けた。筆者は、信仰が実際の核であるか否かという点が大きいこと、小倉の場合は神社を核としなくなりつつあるが、代わりにフィクションの人物をカミ的存在とする動きも生じており、ここに創唱宗教ではなく民俗宗教を基盤とする日本の宗教的特色が現れてきていると考えている。この点については今後掘り下げて言及する必要があろう。
- 9) 現代社会全体が都市化されていくなかで、都市の内部における世代間の意識の溝は大きくなっている。村落や都市という空間の

相違よりも、世代間の意識の相違のほうが大きいのではないだろうか。空間に規定された視点(あるいは二項対立的に捉える視点)に立脚した「伝統」や「伝承」をめぐる議論よりも、世代間の相違を明らかにし、そこから議論を始めるほうが、空間を越えて現代の「伝統」や「伝承」のありかたを問い合わせることにつながるのではないかと筆者は考えている。

*文中にも明記してあるが、本稿の「2-2. 形態を維持するための中身の変化」は、論旨の展開上、筆者の旧稿（「都市祭礼における有志チームの発生と機能—その考現学的研究—」（『生活學論叢』vol. 1 日本生活学会 pp. 15-27 1996）と重複する部分がある。

中野 紀和（なかの きわ）

1967年生。成城大学大学院博士課程修了。萩国際大学専任講師。都市人類学、都市民俗学専攻。主な論文に、「都市祭礼における流動層：小倉祇園太鼓を事例として」『日本民俗学』（日本民俗学会）第205号、1996年、「都市祭礼における有志チームの発生と機能：その考現学的研究」生活学論叢（日本生活学会）第1号、1996年、「視線の力：都市祭礼・小倉祇園太鼓からみた新たな紐帯」日本生活学会（編）『祝祭の100年』ドメス出版、2000年、など。